
雨音村忌憚（仮）

ricca*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨音村忌憚（仮）

【Nコード】

N2122Q

【作者名】

ricca＊

【あらすじ】

雨音村という雨季が長い摩訶不思議な村で、大学生と宮司とちよつと不思議な友人たちが綴る、のんびりとした短編型連載形式のお話。

平和かと思えば不穏な動きがあったり、平凡かと思えばちよつと特別だったり。少し妙で、けれどほつとするような、そんなお話を目指して。

主な登場人物について。

主に出てくる人たち←

● 水無月 暦みなつき れき…成人はどうに過ぎてるらしい神社の一人息子。宮みや司づかさ。ボケ担当。

● 東雲 秋人しのめ あきと…平凡な大学一年生。村出身村育ちのわりに妙にシビアなところがある。

● 錦乃にしきの…錦鯉。その名の通り魚類、金色の模様がある珍しい鯉。でも鯉。

● 上総かずさ…水無月家に居候中らしい美人。性別不明。本人も特に気にしていないらしい。

こんな人たちが物語を紡いでいます。

出会った時の印象（東雲秋人の場合）（前書き）

オリジナルサイトからお引越させましたものです。

数年前からプロット段階で止まっていたもの。和物で不思議テイストな噺が書きたかった模様。

タイトルはまだ仮タイトルの状態。正式なタイトルがつくのはいつのことやら。

本来はきちんと纏まった話の長篇だった筈が、気が付いたら短篇連載と言う形に。

時系列は話の通り、とは限らないです。過去話が来て、現在話が来て、また過去話が来て、などあります。

完全創作なので地名とか村名とか全部フィクションです。おかしなところがあってもご愛嬌でお願いします（！）。

登場人物は主にふたり＋α。文章形式は短篇連載なのでその時々により違ったりします。

出会った時の印象（東雲秋人の場合）

あの人の第一印象を語れと言われたら、まず間違いなく俺はこう答える。

——変すぎるくらい、変な人。

あまねむら
雨音村と呼ばれるこの村はその名の通り、一年を通して雨季が長い。

梅雨前線とか秋雨前線とか、雨季と言えばそういった前線の活動が活発になって時期的に多く雨が降るのが一般的だが、この村は違う。本当に年中雨が降っていてもおかしくはないのだ。

生まれ育った村人たちは当然の如く常識だと思っているようだが、俺からすれば非常識この上ない。

一年の約半分が雨季って異常だろう、どう考えても。

念の為言うが、俺はこの村で生まれてこの村で育っている、れっきとした村人だ。

だというのに文句を言うなんて筋違いなんだろうが、やっぱりおかしい。

小中高と村の中で育った俺が外に興味を示して、親が微妙に渋りを見せていたことをさりと無視して村、はつきり言うとすでに県が違う大学を受験し外を知ったのはあながち間違いではなかったとしみじみ思うわけだ。

ちなみにその大学には約二時間半、毎朝四半時に起きて通っている。……なんでそんな早いかというと単純に電車が無いからだ。乗

り換え時間も含めて、四時半に起きる。

最初は部屋でも借りて一人暮らし……と考えていたのに、母親がそれだけと言ってきたものだから諦めた。

過保護だと思われるかもしれないが、ある意味これが村では常識だったりする。やっぱり変だなあとと思うのだが、仕方ない。

……早く一限の講義なんて無くなってしまうえば良いと思う。切実に。

えらく話がずれてしまったが本題に戻すと、この村は変だ。本当におかしい。

中でも特に目立って変なのが、この村の外れの筈なのに村人からは中心だと信じられている“とある神社”だ。

その名も『雨音神社』。村の名前がそのままついた神社は、ずいぶんと古くから存在しているらしい。

神社では一般的な鎮守の杜に囲まれ佇む其処は確かに、俗世とは違う雰囲気醸し出している。

俺はあまり神社に近寄る方ではなかったけれど、初詣や受験祈願だけはしっかりと行っていた。

都合の良い時だけ神頼みするのは俺だけではなかったと思いたい。俺の祖母が若い頃にはそれなりに皆信仰心があり栄えていたらしいが、此処最近では村の人間も一部を除いて俺みたいな若者が増えた所為か、神社は中心ではありながらもひっそりと佇む、という形がしっくり来るようになっていた。

まあ、それでも他所よりはずっと神社を奉っている方だとは思いう。

普段は誰も居ず、静まり返った神社。

年末年始は忙しそうにしているだろうと思えば、実はそうでもない。

そう、この神社がおかしいのはまずそこだ。本当に人が居ないのだ。

例え年末だろうと。年始だろうと。

神社と言えば年始はお守りとか破魔矢とか、そういったものを初詣に来る参拝客に売るのが普通だ。でも、それが無い。

賽銭箱と、ぺんと置かれたお守りや破魔矢。持っていてくださいといわんばかりに置いてあるだけなのだ。

世間一般、物取りや万引きという物騒な事件が相次いでいるこの時代に、セルフサービスな精神旺盛の神社が何処に在ろう。いやまあ、此処に在るのだが。

昔からそうだったらしく、村人は律儀に……まあ、当たり前なのだろうけれどお守り代と破魔矢代、そしてお賽銭を入れてそれらを家に持ち帰るのだ。

常識から外れている、と普通は思うだろう。けれど、村ではこれが当たり前。

神社もこれが当たり前。

そうなった起源はどうやらこの村に独自に伝わる信仰があるらしく、そういえば昔に祖母から聞かされた記憶があるけれどすっかり忘れてしまった。

単純に変だなあと感じていたからこそ、俺は神社にはあまり近寄らなかった。

——近寄らなかったのだが、あることを目撃してしまったが最後、俺はこの神社との関わりを断ち切るどころか、深めてしまうことになったのだけだ。

その日、傘をうっかり忘れてしまった俺は、雨音村の雨の制裁を余すところなく受けていた。

前の日が雨で、今日の朝は晴れていた。折り畳み傘は乾かす為に庭先に干されたまま、俺は四時半に起きていつも通り五時過ぎの電車に間に合うよう家を出たのだが、それが間違いだった。

講義を受けて、もうすっかり日も暮れた時刻。がたんがたと揺れる電車で村唯一の駅へと続く線路を走っていた電車に、ぺちん、と何かが当たる音がした。

ふいに手元の本から視線を窓へ向けた時見えたのは、まるで境界線のように広がる雨雲。

雨音村に入るトンネルの、その向こう側とこちら側ではっきりと分かれた、それ。

(……怪しすぎるだろこの村。呪われてるんじゃないかって俺傘持ってたねえ……)

生まれ育った村に生まれて初めて明確な嫌悪感を抱いたのはこの時だったかもしれない。

雨具は無い。しかし電車は降りなければ家に帰りっぱぐれるワケで、仕方なく車内放送と共に開かれた扉をいつも通り出た時、俺の周りは一瞬と降る雨の音しかなかった。

無人駅を、備え付けてある切符入れに切符を放り込んで出る。駅の建物と呼べるのかも分からない木製の、申し訳程度の屋根からのぞく空は灰色で、絶対に止まない雨を象徴付けていた。

此処から家まで、歩いて軽く三十分。ちなみに雨が多いこの村で、舗装もされていない砂利道を自転車で疾走するなんて自殺行為は誰もしないから、もちろんそんなものはない。

雨に打たれることを覚悟で三十分歩くしか、選択肢は無いワケで家に電話して迎えに来てもらおうかと考えても、生憎父親は仕事で居ないし母親は車の免許なんて持ってない。

(……諦めて濡れて帰ろう)

ものの数分でそこに行き着いた俺は、仕方なく一步を踏み出した。

じわじわと衣服に水分が浸透してくる感覚はあまり気持ちの良いものではないが、慣れてしまえばどうってことはない。

風邪くらいはひいてしまいかもしれないが、熱を出さなければいいだけの話。

家に帰ってすぐに熱い湯でも浴びれば、きっとそれも無いだろう。

兎にも角にも早く家に帰りたいかった俺は、近道を通ることにした。その近道と言うのは普段寄り付かないあの『雨音神社』を経由する道だった。神社を抜けて真っ直ぐに道に出れば、実はかなりの短縮になるということに気付いたのはつい最近のことだったと思う。単なる近道として神社を使うなんて罰当たりな、と思うことなかれ。普段なら絶対にしない。今回は、緊急事態だ。

ばしゃばしゃと水溜りに足を入れるたびに跳ねる水と泥をなるべく無視しながら漸く着いた神社は、やはり静かだった。

「……失礼しまーす……」

まるでよそ様の家にお邪魔するような台詞を口にしたがら、俺は神社の敷地内へと入った。

しんと静まり返った別空間のような場所は、雨の音すらまるで防音壁でもあるかのように感じさせない。ともすれば少し、異様だ。

さっさと抜けてしまおう。早急に結論づけて、俺は足早に敷地を駆けた。

………ば　　しゃ、ん

ふいに水音が耳元に聴こえた時、心臓が飛び出してしまうかと思った。

驚いて振り返った俺の背後には何も無い。それなのに、その水風船を割ったかのような音は何時までもいつまでも聴こえる。

水溜りを勢いよく踏んだとしても、こんな音、出ない。

………ぱ　　しゃ、ん

「………なんだ、よ」

変だと思うから近寄って居なかった神社。よもやそこに偶々この近寄ってしまったことが運の尽きだったのだろうか。

俺の鼓膜に確実に振動を与える音は、まるで俺を威嚇しているような、呼んでいるような、不思議なリズムを奏でていた。

その時、どうしてだろうか。

突き止めてみたい……などと、思ってしまったのは。

人間は、自分が許容出来ないほどの出来事が起こると、真っ先にそれを否定する為に己の目で見に行くという性質がどうやらあるらしい。この時の俺は、まさしくそれだった。

ふらふらと、家とは全く反対の方向へ——神社の裏とも言うべき場所へ、俺は向かった。

音はどんどんと大きくなる。間違いなく原因があると、確信した。怖いとか、気味が悪いとか、その時は不思議と感じていなかった。今からして思えばずいぶんと度胸のあることをしたものだと思う。

やがて辿り着いた先に、大きな池と、佇む人を見つけた。

その人は、雨が降り注ぐ中じっと池を見つめていた。

着物姿、と言ったらしいのか、宮司……そうだ、神社の宮司が来ているようなあの袴姿で、まるで京傘のような傘をさして佇んでいる。周りには誰も居ない、その人だけだ。

けれど、なにやら話し声が聴こえる。

もう少し近寄ってみれば聴こえるかもしれない、と、俺はまるで絵のような空間に一步だけ近づいた。

はつきりと聴こえてきた声は、男にしては比較的高い、なんとなくまだ少年と呼んでもいいんじゃないかな、と思えるような若い声。持ち主はおそらく立っている宮司のものだろう。近寄ってみると

結構小さい人物だということが分かった。

でも何処をどう見ても、話し相手なんて居ない。

彼は池に向かって一生懸命何かを話している、ワケで。

(……………危ない人?)

だからこの神社、誰も対応に出なかったのか? と、そんな疑問がむくむくと湧き出る。

もう少し、と近づくと、今度は何を話しているのか、内容が聴こえてきた。

「……………錦乃さんはまたすぐそうやって怒るんだから……………ああもう、ゴメンなさい。僕が悪かったですよ。だから機嫌を直してください、ね? 錦乃さんが機嫌を直してくれないと、この雨ずっと降ってしまうんですから」

(……………は?)

「え、そ、そうじゃなくて……………ち、違いますってば、錦乃さん、僕はそういう心算で言ったんじゃないですよ。そりゃあ確かに上総のお咎めは怖いけど……………ってああああ、そうじゃないんですって! 機嫌直してくださいよ……………」

(……………え、はい? どういう、こと、)

独り言とも取れるそれがしかし会話として正立しているような間を持つていることは何よりも。

彼が話しかけている池に、この雨の原因がある、という言葉があまりにも衝撃的過ぎた俺は、

「……………何をしている」

「っひぎゃ!」

ぽむと強く叩かれた肩に思わず悲鳴を上げ、あまつさえ尻餅をつくという失態をしてしまったのだった。

「……主、村の人間が紛れ込んでいる」

「へ？ あ、……本当、だ……」

そんな気の抜けるような声に、俺は漸く別次元に吹っ飛んでいた意識を取り戻した。

気が付けば背の高い……けれど何とも中性的で男なのか女なのか分からない人に腕を掴まれ立たされる。

とんだことに巻き込まれたかもしれない、と、漠然と感じ取ったのは本能だろうか。

背後に立って俺の逃走経路を塞ぐ中性的な人と、目の前には先ほどなにやら独り言を呟いていた宮司。

その宮司は思ったとおり俺よりもずっと小さくて、一見高校生ほどこに見えた。

背後の人はあまり観察出来ないが、目の前に立つ彼はじっくりと俺を見ていたから、俺も観察する時間が出来た。

髪は、漆黑。言うなればこれが本当の烏の濡れ羽色というのだろうか、綺麗な黒だ。

長すぎず、短すぎず、清潔感と簡素な印象を与える切り揃えられた髪が縁取る顔は、小さめで色白い。睫毛なんてかなり長いんじゃないだろうか。

本当に男かと疑いたくなるが、どうやらやはり男らしい。着ている着物が男物というか、巫女が着るようなそれではないし。

遠目ながらに性別を見分けていたが、間違いは無いようだった。

大きな目はツリ目よりはどちらかといえば垂れ目かな、という感じ。変に垂れているわけではなくて、バランスが取れた穏やかな目、と言うのだろうか、まあそんな表現が一番しっくり来る。

瞳の色はやはり黒い——かと思ったがなにやら違っていて。

表現するとするのなら、蜂蜜色。いや、もっと深い^{こがね}黄金色？　でもそれ以上に驚いた。

正直言って結構人間離れした色をしていると思った。だってそうだろう？

もう片方——俺から見て左目だから、相手にとっては、右目。その色が違っているんだから。

オッドアイ、と言う言葉があることは知っていたけれど、実際に、しかもこんな非現実的な色を見るとは思っても見なかった。

片方は、黄金色。

もう片方は、翡翠色。

薄桜色の頬に、薄紅の唇がまるでそこいらの女の子より綺麗な、けれどなんともこの宮司には似合っているような気がして。

細いシルエットとか、うーんと悩む時に出す声とか、正直もう一度性別を疑いたくなった。

というか、俺のコト見すぎだろうこの人。そう思ったからこそ、「あもう」と声を掛けたのは間違いじゃないと思う。

止まっていた時が、一瞬だったのか、何十分もだったのか。

はたと数回瞬きをした俺の目の前の宮司は、何とも慌てた様子で「すみません」と口にした。

「何分お客様なんて初めてで……ああ、いえ、僕の代になってからは、と言う意味なんです……すみません、じろじろと。ご気分、害されましたよね……」

「え、い、いや、そうじゃ……なくて。無断で侵入したのは俺の方ですから……その、謝らないで下さい」

「……ありがとうございます。お優しいんですね」

いや、うん、どう考えても俺が悪いんだからそう素直に礼を言われても逆に俺は素直に喜べないんですが。

俺の心の内を知ってか知らずか、背後の人がとつ、と告げる。

「主、……とりあえず、“戻した”方がお客人も不思議と思わず済むのでは」

「……へ？ あ、あああ！ す、すみませんっ！」

会話の内容はよく分からなかったけれど、途端に慌てた宮司は突如ぺちんと手を瞼に当てて何かを呟いた。

もう一度目を開いた時、はめ込まれていた瞳はあのオッドアイではなく……灰色っぽい、黒。

……あれ？ 黒い……？

「な……な、なっ……」

「……どうやら余計混乱させてしまったみたいなんですけど……上総」

「………私も、人間ひとと交流したのは非常に久しいことだ、何とも……」

状況を飲み込めずに慌てふためく俺を尻目に、背後の人はやはり淡々と、けれどなんとなく困ったような声音で呟いた。

妙な間が出来てしまったその場を引き戻したのは、ばしゃん、という水の音。

そうだ、俺はこの音を聞いて此処まで来てしまったんだと、原因であるらしい池に眼を向けた。

……鯉が跳ねていた。まごうことなく、鯉が。なにやら金色の模様を持った、鯉が。

「錦乃さん……？ え……あ、あ！ ちょ、貴方濡れてるじゃないですか確かにそういえばっ」

「うあっ、え、あ、今！？ 今そこ気付いたの！？」

……なんだこの漫才。

そう思ったのは俺だけではなかっただろうと信じたいが、あの場にいたのが何しろあの面子だったから確証は何一つ無い。

というか、『錦乃さん』って鯉のことだったんだろうか。そう考えれば池に話しかけていた理由も納得がいくけれど、変だ、妙だ。

何で鯉に、人語が通じるんだ。

しかし目の前の宮司は確かにあの鯉を『錦乃さん』と呼んでいて、しかもどうやら会話が成立しているらしい。

俺がずぶ濡れ濡れ鼠の状態を彼に伝えたのは間違いなく、その『錦乃さん』なのだ。

そしておそろく……俺を威嚇か呼ぶかなにかしていたあの音も。

「えーっと、兎に角ウチに上がってください、すぐにお召し物を用意しますから！ その前に湯浴みをした方がいいかな……だーもう上総！ ボーっとしてないでその方をお連れしてくださいっ！」

「……承知した、主」

あれよあれよと言う間だった。

神社とは別の建物のこれがまた立派な屋敷に連れ込まれた俺は、これでもかというほど手厚い歓迎を受けたのだけれど……。

長くなってしまうので、一先ずそれはまた別の話にしようと思う。

まあなんというか……不思議な縁だ、と思う、我ながら。

俺はこうして、その後の俺自身の人生をなんとも変な方向へと変えてしまった人物と出会ったのである。

第一印象を問われれば、間違いなく、何度でも俺はこう答える。

……変すぎるくらい、やっぱり変な人。

それが俺の中の一番初めの、『水無月暦』という人の、印象。

出会った時の印象（東雲秋人の場合）（後書き）

のらりくらりと綴れたらと。

こういう感じのお話も書くのは好きです。

上総さんのセカイ考察（雨音村忌憚・式）

この村の出身でありながら、この村のことを何一つ知らなかった。でもあんな複雑な、それこそ常識を根底から覆されるような話だなんて思わなかったし。

……やっぱり、非現実的だ。でも、事実なんだ、と。改めて認識してしまった。

「上総さんって、村について詳しくったりするんですか？」
「……私が……？ 主から何か、お聞きになったのですか」
「え、あー……まあ、そうなんですけど」

大きくて伝統的な日本家屋。

その客間で俺が話し掛けた相手は、この家に昔から住み込みで水無月家の世話係をしているという上総という人だった。

綺麗というよりはもう神の彫刻に等しい美しい美麗な顔に、変化の無い淡々とした表情を常に貼り付け抑揚の無い声で話す人である。ちなみに性別は不明。本人が何とも言わないので俺もわからない。

水無月家はかの有名な……と言ってもいいのかどうなのか、しかしこの村では確かに有名な“雨音神社”を管理する宮司が住んでいる家だ。

当主は水無月暦。どう見ても十代半ばかギリギリ後半にしか見えない顔立ちと背格好をした人。

けれどどうやら成人はとうに迎えているらしく、高校生かと一度

尋ねた時は大爆笑された。……普通は怒るんじゃないだろうか。

兎に角その水無月家の暦という人は変わった人で、更に言えばこの家自体相当変、なのだ。

何しろ俺が此処を偶然訪れ偶然ばったり彼に出会うまで、この神社は人の姿を見せたことがなかった。

普段は当たり前、新年のお守りや破魔矢を売る時ですらセルフサ―ビス状態。人っ子一人居ないわけだ。

今のご時勢に「お金払ったらどうぞご自由に」なんて神社が何処に在るだろう。全国探したってきつと此処だけだ。断言出来る。

どうして水無月家の彼らが極端に表へ出るのを嫌うのか、詳しい理由を聞いたわけではないから何とも言えない。けれどこの神社と村の関係はかなり昔から“こう”だったらしい。

俺が祖母から聞いた話だから、まず間違いないだろう。

……だから、というか。

本当に偶然が偶然に重なって幸か不幸か、水無月家の彼らを目撃してしまった俺は、当主の計らいで水無月暦の初の客人として持て成されていて、家への出入りも基本的に自由だったりする。

これはまだ誰にも話していないけれど、俺の密かな自慢だ。

「雨音村のこと……ですか……。以前、東雲さんは変わっていると仰っていましたね」

「俺、大学が村の外というか県外だからかもしれないですけど、常識から結構外れてません？ 此処って。暮らしていると気になりませんけど」

……そして。

変といえばもう一つ、神社を昔から深く信仰している雨音村も、雨季が長くひたすら雨が降りやすいという変わった村だったりする。この雨が降る降らないに関しては一寸信じられない出来事があったりするのだが、あえてそれは振らないでおこう。

水無月暦——俺は暦さんと呼ばせてもらっているから今後こう

しよう——こと曆さんは、村のことや雨の理由について俺が尋ねると少し困ったように笑って、「上総が一番詳しく話してくれるかも」と言っていた。

宮司であり当主でもある曆さんがそう言うのだから、上総さんに聞いた方がいいのだろう。

そんな単純な理由から、俺は自ら話さない曆さんを特にどうしてと問うわけでもなく、目の前の上総さんに話を振ったのである。

上総さんはやはり抑揚の無い声と変わらない表情のまま、「そうですね……」と頷いた。

「東雲さんには、起源からお話した方が宜しいかもしれませんね」「……話してくれるんですか？」

「貴方には知って頂いた方が良く判断しました。主の唯一のお客人である貴方には、知る権利がございます」

何とも堅苦しい言い方だが、これが上総さんという人で、更に俺が聞きたい話はかなり時代を遡らなければならいらしい。

長くなりますが、と予め釘を刺されたが、聞いてしまった手前とこののと、好奇心が勝って、俺は素直に頷いた。

すると上総さんは「畏まりました」なんて言いながら失礼しますと恭しく一礼して俺の向かいに正座した。今更だがこの部屋は和室で、床の間や違い棚なんかがある本格的な和室だったりする。

ちなみに、この家、洋室なんて一切無いのであしからず。

「東雲さんは、神、と言うものがどういう存在であるかご存知ですか？」

上総さんの話は、そんな突拍子も無いところから始まった。

神。思想によって様々な違いがあるだろうけれど、神といえば絶対的な存在とか、救いを与える存在とか、万物を決めている存在、なんてありきたりな考えが頭を過ぎる。

「俺は……まあ、多分一般的な論かもしれませんが、それこそご神体として奉られている存在だったり、まあ、俗的に言えば神頼み、な神様を想像しますけど」

「そうですね。現代の人間から見るとそのように取られてもなんら不思議は無いでしょう。神、という定義は非常に曖昧です。誰も教えるわけでもない、存在を見るわけでも無い。だから象徴的に具現化された神を奉り頼みの綱とするのは当然の行為と言えます」

いつの間に用意されたのか、どうぞ、と差し出された湯飲みには綺麗な色の緑茶が程よく注がれていた。俺は頭を下げて受け取ると、じんわりと温かい湯飲みを両手で包む。

「……かつて日本が倭国、と呼ばれていた時代、倭の国の女王として君臨していた卑弥呼。彼女は人智を超える力を以って人々を率いたとされ、ある種神格化されています。天照大神は卑弥呼ではないか、という説もそこから来ている通りですね。安倍晴明、彼もまた貴方がたの間では有名な人物ですが、陰陽道という特殊な力を持っていたとされる彼も、その実態は謎に包まれています。確かに認知され、神格化されています。」

他に、付喪神、というのもありますね。日本は古来から万物八百万には魂が宿るという思想があります。付喪神はまさに典型でしょう。彼らもまた、神格化されたものです」

「は、あ……」

「神……とは。要するに、それなのですよ」

「……はあ？」

唐突に言われた言葉に、俺は思わず首を傾げてしまった。今の話のどこをどうしたら“それ”になるのだろう。

少し急でしたか、とやはり淡々と語る上総さんはけれどどこかひどく丁寧に丁寧に、俺にわかりやすいように説明をしてくれた。

「要するに神とは、何らかの魂や思念、また、日本には馴染みが無いでしょうが……精霊、そして此方は分かるかもしれませんが、アヤカシ……それらが何らかの力を得、神格化したものを指しています。実際に神々の中には人から忌み嫌われる、人とは違う姿をしたものが神とされる事例もあるように、神格化されるものは人であったり物だけであったりとは限りません。何をその可能性を秘め

ているとお考え下さい。また、神、という呼び方もそうである必要はありません。神格化されているかどうか、です。

神格化されたり、神と呼ばれるようになったそれらは、個から全へと存在を移行してゆきます。即ち様々な“生きている人間”の想であったり考であったり、様々な左右されやすくなるのです。そうして多面性を帯びてゆく。だからこそ、個々が感じる神の姿には誤差が生じるわけですね」

……なんだろう、大学の講義を聴いているような気分になってきた。

講義名はさしずめ「上総さんのセカイ考察」かな……なんてぼんやりと考えている俺を知る由もなく、上総さんは言葉を続けた。

「しかし中には神格化されても個を失わない神が出ることがあります。彼らは己が“人々に認知されてはならない存在”だということを知覚しており、人間が暮らす俗世には一切干渉してはならないと決められているのですが、時々それを破る神も居ます。良く知られている怪奇事件などは殆ど、彼らが関わっていることが多いのです。彼らに属するものが引き起こしていることが大体ですが」

「……要するに……神様は確かに居るけど、それは俺たちが漠然と考えているようなものとは一寸違う……んですか」

「違うといえば違うともいえますし、そうだといえばそうだとも言えます。多面性を帯びるのが彼らの存在意義でもありますから」

上総さんはこれまた一つの間に用意してくれたんだろうか、お茶請けである苺大福を俺に手渡しながら言う。

……ホントに完璧だなあ、この人。

「……なんだか複雑ですね」

「ええ。しかし日本は特殊だと思いませんか？ 自国の神々が信仰されている他に様々な他国の神々や宗教が広がっている。自国の神々も、他国の神々ほど力が強いわけではありません。まあ、思想的な問題なのでしょうが……海外の神々が日本に入り広がり、知識として認知されていることは多いですね」

「まあ……外国に比べると結構、思想とかバラバラですよ。イベントとなれば何でも取り入れるし……仏教とキリスト教のイベントが混在してる国なんて珍しいだろうし……」

「良いところ取りの思想とも捉えられるでしょう。悪いことも言い切れませんが……しかしそもそもこうなったのには原因があります。この国の霊的な意味での“空洞化”です」

正直言って。

こういった思想が伴う話は、俺は苦手な部類に入る。世界の成り立ちや世界をどう考えるかなんて人それぞれだし、神様なんてその際たるものだろう。人それぞれに思いがあって不思議ではないわけだから。

だというのに、俺は上総さんの話に聞き入ってしまったている。

不思議だ、と思うけれど、どうしてだろう。全部が引き込まれるように耳に入ってくるんだ。

「空洞、化……？」

「はい。この国は様々なものが入りやすい。その理由が空洞化、つまり土地を守護する力そのものが弱いと考えられるのです。かつては強い力で守られていたのですが、何らかの形で緩んでしまった。人々の信仰心の問題もあるのかもしれませんが——そう考えるのが妥当でしょう。」

だからこそ、様々な“人格化の可能性を持つモノ”が入り込み、根付いたのです。思想に、人に……土地に」

一息つくように上総さんは自身の湯飲みを傾けて、お茶を口にしました。俺もなんとなく倣ってお茶を口にする。仄かな甘みが広がって、喉を潤した。

上総さんはお茶の淹れ方がとても上手いらしい。俺なんか淹れると渋みばかりが勝ってとても苦く感じるというのに、このお茶は甘みが広がるのだから。

「美味しいですね、お茶」

「有難う御座います。今度淹れ方を書いてお渡ししましょうか？」

……なんで俺が淹れるの下手だって分かってるんだらう。

「……お願いします。ええと……すみません、話の腰折っちゃって。続き、聞かせてください」

本当になんとかぼつきりと綺麗な音を立てて折ってしまった話の腰を戻してもらおうと言うと、上総さんは「お気になさらないで下さい」という声と共に湯飲みを置いた。

「此処で重要となってくるのは“土地に根付いた神”です。思想の中や人々の口伝で伝わる神よりも、土地に根付いた神は媒介があり尚且つ土地という変化しないものに根付いている為、人々の“記憶から薄れにくい”性質を持ちます。

神社というものは土地と神を結びつける役目を担った最たるものです。神社がある限り、人はそこに“神が奉られている”のだと無意識にも感じる。記憶から薄れることはないのです。此処までお分かりになりますか？」

「ええと……なんとなく」

「日本はこの狭い土地で統一されることなくそれぞれが国であるとし、覇権を巡って争っていた歴史があります。この歴史が深く関わっている、としたらどうでしょうか」

「もしかして……それぞれの土地に、それぞれ“カミサマ”が入り込んでしまった……ってこと、ですか」

「その通りです。良くご理解なさっていらっしゃる」

なんとなく、初めてこの人が笑ったような雰囲気を感じた気がする。雰囲気ってただだから実際に笑ってくれたわけじゃないし、表情は微塵も動いていない。

けれどもこう感じたんだから多分何時もよりは感情が動いているのかもしれない。

俺はそんなことを思いながら上総さんの話を待った。もちろん、「ありがとうございます」とお礼もちやんとそえて。

「土地に根付いた神と土地自体は濃密な力関係を築きます。一種の箱庭と考えると分かり易いかもしれません。土地を一つの箱庭とすると、箱庭には須らく神格化した何らかが存在し、大地の気の流れを司っています。この均衡が崩れると、自然災害など目に見える形で異常が溢れるのです」

「力の均衡の崩れ方が大きければ大きいほど、他の“箱庭”や“神格化したモノ”にも影響を与える……？」

「そうです。個でありながら全であり、全でありながら個でもある。神格化したモノはその時点で多面性を帯びた全となりますが、影響力は時に個となる場合も、制御出来ないほどの歪みが生じれば全となる場合もあるのです」

つまるところ、地震とかそういうのは個が大きすぎる力によって他の個に影響を与えてしまつて、結果的に全になって広い範囲の土地に影響を及ぼす……と。こんな感じだろうか。

俺はそこまで頭がいいわけでもないし理解力があるわけでもないから上手く言えないが、大体こんな感じだと思う。

「長い前置きになりましたが、此処からが本題です。雨音村は何故、このような天候が多く、且つ閉鎖的なのか――」

「……カミサマに影響を受けてる……って言うことですか？」

「この土地の今の神は……いえ、今の、というのもおかしいですね。既に絶対神となっていますから。」

――この土地の神は、錦乃です。加えて言うならば、彼女は生き神と呼ばれる存在になります」

そう告げられた瞬間、俺はぽかんと上総さんを見つめてしまった。今この人、なんて言った？

錦乃……って、言った気がする。俺の聞き間違いじゃなければ……いや、間違いない。

でも、錦乃……さんって。暦さんがそう呼んでいたのは、確か……確か。

「……あの……鯉、が……？」

「ええ。彼女がこの土地——雨音村という“箱庭”における“絶対神”であり、秩序そのものです」

……なんてこった。

そう口にしたかったけれど、きっと俺は音にすら出来ていなかったと思う。

今の話の流れと、そして俺が聴いた暦さんの言葉を加えた総合的な判断をすればなるほど確かに、『錦乃さん』は神様なんだ。

だって言っていたじゃないか、暦さんは。

初めて会ったあの場所で、池に……正確には、金色に輝く鱗を持つあの鯉に向かって。

『——錦乃さんが機嫌を直してくれないと、この雨ずっと降ってしまうんですから』

本当に……なんて、ことだろう。

「本来、神格化されたモノは象徴化されど本来の姿形は人の目には映りません。しかし、錦乃はご存知のようにあのような姿ですから、東雲さんにも見る事が出来る。そして、実際に“生きて”いる。だからこそ、生き神たりえるのです」

「じ、……じゃあ、錦乃……さん、は、ずっとこの村を？」

「この土地で神格化されて数百年……まあ、かなりの時は経つでしょう。彼女が生き神であるのには訳があるのですが——これは、主が直接貴方に話すべきことかと、私は思います」

水無月の家系にも関わることで、と。

上総さんは纏めて、俺に視線を向けながら「大丈夫ですか？」と問い掛けてくる。

話が分かりましたか、という意味の大丈夫なのか、錦乃さんこの村の関係を知ったことについての大丈夫なのか、どちらかは分か

りかねたけれど、俺は頷いておいた。

本当は頭がごちゃごちゃしているし、理解もきつと半分以上は出来ていない。それでも頷くしか出来ない。

なんだかとてもない事実を知ってしまった。事が大きすぎて整理が出来ない。

いっぱいいっぱいなのに妙に冷めてて空っぽな感覚だ。

「……非常識、って……言えば、それまでですよ。でも事実で……村人だっていうのに、俺は錦乃さんのこと知りもしなかった」

「かつては常識であったものが、時代と共に変化し非ずとなる。ですから、そう思っても不思議ではありません。そして錦乃を知らなかった事実を恥じることはありません」

言われてしまえば、確かにそうなんだと思う。何せ話は神々の起源のようなもので遡らなければ分からなかったし、俺が知る由も無いような知識も多くあった。

どうしてそんなことを上総さんみたいなの——見た目で決めるのはどうかと思うけれど……暦さんの件もあるし——若い人が、知っているのかも不思議だ。

でも。事實は、事実なんだと。上総さんの顔を見れば分かる、この人は嘘を話していない。大体嘘を話したところで何のメリットもないだろう？ 特に錦乃さんのことなんて、神様なら神社が守るべき存在だ、嘘なら俺に話す必要なんてない。

錦乃さんについては暦さんに聞けなんて言葉も、出る筈がない。

「しかし、今、貴方は確かにこの村に触れた。今後どうされるかは東雲さん次第ですが、事実に触れたことによって認識が変わった今の貴方は、今までの何も知らなかった貴方ではありません。知らなければ、知れば良いこと。知っている者に無知を明かし、あるがままの己を見せた貴方に、私は好意的な印象を持ちましたか？」

「そ、そんなんじゃないですよ、俺。ただ暦さんに気になったから聞いただけだったし……評価して貰えるようなこと、してません」

「それでも、です。ご自身が住まう土地に興味を持つこと、それを

知り得そうな者を的確に見定め尋ねること。十分評価されるべきかと存じます」

上総さんの物言いは相変わらずだし、俺も混乱したままだったけれど。

やっぱりどこか柔らかい雰囲気のままそう言ってくれた上総さんに素直にありがとうございますと言えたのはきつと、間違いじゃないと思う。

それにしてもトンデモな事実を知ってしまった。この村の神様があの『錦乃さん』だったなんて。

……上総さん、錦乃さんのこと『彼女』って言っていたような。そうか、雌……じゃなくて、女の人なんだ、あの鯉……。

じゃあ、『錦乃さん』と言葉を交わしていたように見えた暦さんもまた、やっぱり特別な人なんだろうか。

まさかあの人も『生き神』なんてことは——あれ、でも初めて会った時、確か言ってたよな。僕の代では、とかなんとか。

だとすると暦さんは代替わりしているってことだし、この神社の人間は、神ではなく人なんだろうか。

疑問に思っ上総さんに迷惑ついでに尋ねてみると、整った眉が少し顰められた。

あれ、不味いことだったんだろうか。

「主の件に関しては、主本人にお尋ね下さい。私が独断で話して良いことではありませんので……申し訳ございません」

頭を下げられてしまった。

「うわ、ぜ、全然構いませんよ！ 上総さんは何も悪く無いですから謝らないで下さい。俺、きちんと聞いてみます、暦さんに。駄目だったら駄目だったで無理に聞き出しませんから」

安心してください、と、良く分からない言葉を連ねてみると上総さんは頭を上げてくれた。

そして——今度こそ。

「主は……良い方に出会えたようですね」

これでもかというほど綺麗に、本当に少しだけど、良く見てないと分からないくらいだけど。

確かに、微笑ってくれていた。

とりあえず雨音村が……というよりも土地と神の関係がどうい
もので、影響力は絶大だということと。

村の神様があの『錦乃さん』という鯉であることを知ることが出
来た。

変だ変だとは思っていたけれど、此処まで常識では理解出来ない
ような内容ばかり出てくるとは思わなくて、俺としてはめげてみた
い気持ちちが八割方。

でも、もっと詳しく知りたいと思ってしまったのは、多分、

『上総が一番詳しく話してくれるかも』

……と、教えてくれた暦さんの困ったような笑いが、今になって
みれば——少し、寂しそうに見えたから。

話してくれるかどうか分からない……結構重要な秘密なんだろ
うし。

けど、俺たちは出会ってしまったわけで。色々と、見てしまった
わけで。聞いてしまったわけで。

今更都合良く「訳分からないし変なんでさようなら」なんて出来
る筈も、ないんだ。

決意をかたく秘めたところで、俺は徐に湯飲みに手を伸ばし、中
身を啜る。どうしてかな、何時の間にか注がれていたお茶は仄かに
甘く、程よく温かく。

「……おいしいですね、ほんと」

「今度、は無粋ですね。今、淹れ方をお教え致しましょう」
何とも和やかなムードを上総さんと二人、作ってしまった。

本日の講義、これにて終了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2122q/>

雨音村忌憚（仮）

2011年1月17日15時25分発行